

旅行案内書の成立と展開

山本光正

Formation and Development of Travel Guidebooks

YAMAMOTO Hisunasa

はじめに

① 研究史及び旅行案内書について

② 道中記

③ 鉄道沿線案内

おわりに

【論文要旨】

旅行史研究は多様化しているが、基本史料である旅行案内書の総合的研究はこれからの分野のようである。本稿では旅行案内書を分類して通史的に捉え、その成立と変容について述べた。なお本稿では近世から明治中期までの徒歩による移動を旅、交通機関による移動を旅行とし、両者を合わせて旅行とした。

旅行案内書は①旅程に関する案内②地域に関する案内③テーマ別案内④ピンポイント案内に分類することができるが、ここでは①の案内を取上げた。旅程に関する案内とは街道や鉄道沿線の案内のことで、近世の案内は道中記と呼ばれた。

日本において道中記が出版されるようになったのは明暦頃からで、延宝期には形式も完成し定着した。一七〇〇年代には各種道中記が出版され、絵地図のみの道中記も刊行されている。しかし識字率や価格の面から広く普及したとは考えられない。道中記の普及は浪花講等旅宿組合が道中記を出版するようになってからのことであろう。

近代に至り明治二三年東海道線が開通すると道中記は姿を消し、鉄道沿線案内が民

間の出版社から明治二〇年代後半より刊行されるようになるが、大正期に入ると激減している。

国鉄は明治三八年に沿線案内を刊行し、同四二年以降大正末年に至るまでは毎年沿線案内を刊行。昭和四年からは名著といえる『日本案内記』全八冊を刊行している。大正期に入ると民間からの沿線案内が減少するのは旅行の多様化によるものである。近世の旅の多くは伊勢参宮などの社寺参詣を目的としたが、実際には道中を含めて旅そのものが楽しみを享受する場であった。しかし近代に入ると道中は消滅し、旅行は点から点への移動となり、鉄道・バス等の発達により旅行の目的は多様化し、地域別・テーマ別の案内を多数刊行されるようになっていく。

以上のような背景により、旅程に関する案内はその姿を消していくのである。
【キーワード】道中記、鉄道沿線案内書、旅、鉄道、浪花講